

## 51 肝多発転移を伴う非機能性膵神経内分泌腫瘍の1例

高橋 俊作・大関 康志・上野 亜矢  
藤原 真一・小林 由夏・飯利 孝雄  
杉谷 想一

立川総合病院消化器センター内科

症例は52歳、女性。検診にて貧血を指摘され前医受診。CTで肝多発結節と子宮筋腫を指摘された。上部消化管内視鏡で穹隆部に粘膜下腫瘍様病変及び血管拡張を認め、胃生検施行した。病理にて悪性所見認めず経過観察とした。経過観察中、CTにて肝内結節の増大を認め肝腫瘍生検施行、病理にて肝細胞癌が疑われ診断され精査加療目的に当科転科入院となった。当院にて胃病変は壁外からの腫瘍浸潤と胃静脈瘤と診断した。胃免疫組織染色でクロモグラニンA、シナプトフィジン陽性であることから、多発肝転移を伴う非機能性膵神経内分泌腫瘍と診断した。肝外側区域切除による外科的腫瘍減量術を施行し、残存腫瘍に対しエベロリムス投与による治療を継続中である。CTによる経過観察にて、術後6か月時点までに明らかな腫瘍増大傾向を認めていない。今後はサンドスタチン製剤の導入を検討中である。

## 52 多発肝転移を伴う小型直腸神経内分泌腫瘍の1例

安住 基・渡辺 雅史・瀧澤 一休  
坪井 清孝・岡 宏充・青木 洋平  
山崎 和秀・松澤 純・夏井 正明  
若木 邦彦\*

県立新発田病院内科  
同 病理\*

症例は51歳の女性、2010年5月から倦怠感を自覚しており、同年10月より右季肋部痛が出現したために近医受診した。エコーにて肝内に多発する腫瘍があり当院紹介された。腹部造影CTで大小さまざまな腫瘤が見られた。直腸リンパ節腫大も認めた。下部消化管内視鏡にて肛門から10cmに10mmの粘膜下腫瘍を認めた。形態から直腸NETを疑った。肝腫瘍生検施行し、免疫染色でKi67指数は8%であった。直腸原発のG2NETの多発肝転移直腸リンパ節転移と診断した。腹部血管造影にてhypervascularでありTACE施行した。その後low dose FPを開始した。2011年2月よりオクトレオチド筋注も併用開始した。同年4月のCTにてPDと判断しオクトレオチド、エトポシド動注の併用を開始した。同年8月にSDと判断し続行したがリザーバー閉塞してしまった。右葉TACE、左葉TAE施行したところTAEがより効果的と判断した。現在はオクトレオチドとTAEの反復し外来通院中である。比較的安定した経過であり、若干の文献的考察とともに報告する。

## II. 特別講演

### 『肝がんに対するCT透視下RFA』

三重大学医学部附属病院 IVR科

准教授 山門 亨一郎